

芸 術

1 学習指導と評価の工夫・改善

芸術科においては、「芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし豊かな情操を養う」ため、適切な教育課程を編成するとともに、生徒が興味・関心等に応じ、選択履修や発展的な学習をすることができるよう配慮した指導計画を作成するとともに、効果的な学習指導を進めるための工夫・改善を図ることが求められている。

そのため、目標に準拠した、四観点による学習状況の評価を行って、生徒の到達度を適切に把握した学習指導を進めることが重要である。その際、適切な評価規準を設定し、具体的な評価方法の工夫・改善を図り、評価が生徒の学習の改善に生かされるよう、指導と評価の一体化を進めることが重要である。

芸術科の評価については、全ての教科に共通する四つの観点を基本に、芸術科の特性を踏まえ、次のとおり、芸術科の評価の観点とその趣旨が示されている。

関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
芸術を愛好し、芸術文化を尊重するとともに、個性を生かして意欲的、主体的に表現や鑑賞の活動を行い、その喜びを味わおうとする。	感性を働かせて芸術のよさや美しさを感じ取り、創造的に表現を工夫する。	創造的な芸術表現をするために必要な技術を身に付けている。	芸術を理解し、そのよさや美しさを深く味わう。

これら四つの観点を踏まえ、各学校では生徒の実態や科目の目標・内容にあわせた観点別の評価規準を作成し、評価の客観性を高めるとともに、生徒の学習意欲を高めるための評価方法の工夫・改善を行うことが大切である。

なお評価規準については、「おおむね満足できる」状況（B）について設定し、その評価規準に照らして、「おおむね満足できる」状況（B）か「努力を要する状況」（C）かを判断した上で、さらに「おおむね満足できる」状況と判断されるもののうち、生徒の学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていると判断されるものを「十分満足できる」状況（A）とすることが適切である。

2 評価方法の改善・充実

(1) 評価計画の作成上の留意点

- ① 各題材ごと、各単元ごと、各学期ごとに評価を行うなど、具体的な年間評価計画を作成する。
- ② 評価が学期末などに偏ることのないよう、評価の時期を工夫したり、学習の過程における評価を重視するなど、評価の場面についても工夫を加える。
- ③ ペーパーテスト、ワークシート、学習カード、観察、作品、レポートなどの様々な評価方法の中から、その場面における生徒の学習の状況を的確に評価できる方法を選択する。
- ④ 題材の中での「評価規準の具体例」についてはあまり細部にわたり設定することなく、無理なく評価でき、その後の指導に生かすことができるように留意する。

3 音楽の評価計画及び観点別評価の進め方

(1) 評価計画表の例

科目名	音楽 I						
単元名	器楽（箏に親しむ）						
単元の目標	(1) 日本音楽の歴史の流れを知り、箏の歴史的な背景を理解する。 (2) 箏の音色の特徴や、奏法の特徴を理解し、演奏する。						
評価の観点	関心・意欲・態度 (観点 I)	芸術的な感受や表現の工夫 (観点 II)	創造的な表現の技能 (観点 III)	鑑賞の能力 (観点 IV)			
内容のまとまりごとの評価 規準 (器楽)	いろいろな楽器の特性や奏法、表現上の効果、視奏、曲の構成及び曲想に関心をもち、意欲的、主体的に器楽を表現し、その喜びを味わおうとする。	いろいろな楽器の特性と表現上の効果、また音楽の諸要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを表現を工夫する。	楽曲から感じ取ったイメージを、創造的に表現するための技能を身に付けている。	いろいろな楽器の特性と表現上の効果、我が国の伝統音楽の種類や特徴を理解して、楽曲を聴き取り、そのよさや美しさを味わっている。			
評価規準の具体例 (箏に親しむ)	① 箏曲に関心をもち、鑑賞する喜びを味わおうとする。 ② 箏の奏法に関心をもち、意欲的に演奏しようとする。 ③ 楽譜を見て、音高、リズム、フレーズ等に関心をもち、主体的に表現する。 ④ 楽譜に示された記号や標語の意味等に関心をもち、主体的に表現する。 ⑤ 声部の融合と均衡や全体としての調和に関心をもち、表現する喜びを味わおうとする。	① 箏曲の特徴を感じ取っている。 ② 箏の表現方法を感じ取って表現を工夫する。 ③ 楽譜を見て、音高、リズム、フレーズ等を把握し、様々な表現を工夫する。 ④ 楽譜に示された記号や標語の意味等を把握し、それが生み出す曲想や美しさを表現を工夫する。 ⑤ 声部の融合と均衡や全体としての調和を感じ取って、表現を工夫する。	② 箏の基本的な奏法を身に付けている。 ③ 楽譜を見て、音高、リズム、フレーズ等を把握し、表現する技能を身に付けている。 ④ 楽譜に示された記号や標語の意味等を把握し、それが生み出す曲想や美しさを生かす表現する技能を身に付けている。 ⑤ 声部の融合と均衡を図り、全体としての調和のとれた表現をする技能を身に付けている。	① 箏の特徴を理解して楽曲のよさや美しさを感知取る。			
題材(時間)	学習内容		観点 I	観点 II	観点 III	観点 IV	評価方法
箏の歴史と構造 (1)	<ul style="list-style-type: none"> 箏の歴史的な背景を知る。【VTR】 「六段の調」を鑑賞し、箏の演奏法、構造、表現の効果を知る。 楽譜を見ながら演奏を聴き、表現の特徴について話し合う。 		①	①		①	観察 学習カード 1
箏の演奏法 (5)	<ul style="list-style-type: none"> 「さくらさくら（箏合奏用）」の基本奏法練習 グループに分かれ合奏練習 グループごとに演奏発表する。 箏の表現を通して、工夫したところや他のグループの演奏と比較などについて学習カードに記入する。 		② ③ ④ ⑤	② ③ ④ ⑤	② ③ ④ ⑤		観察 演奏 学習カード 2

(2) 観点別評価の進め方

ア 考え方

(ア) 観点Ⅰ「関心・意欲・態度」について

観点Ⅰ－② 「箏の奏法に関心をもち、意欲的に演奏しようとする。」

ここでは、常に爪の角度による音色の変化を意識した奏法習得の姿勢がある場合、「十分満足できると判断される」状況（A）と評価する。また「努力を要すると判断される」状況（C）と評価される生徒への指導の手だてとして、映像資料等から視覚・聴覚をバランスよく刺激する題材を提示し、奏法習得の個人指導をすることが考えられる。

(イ) 観点Ⅲ「創造的な表現の技能」について

観点Ⅲ－③ 「楽譜を見て、音高、リズム、フレーズ等を把握し、表現する技能を身に付けている。」

楽譜を把握し、基本的奏法を身に付け、合奏に反映させていると認められた場合は「十分満足できると判断される」状況（A）と評価する。また「努力を要すると判断される」状況（C）と評価される生徒への指導の手だては、教師や模範となる生徒の演奏を模倣させたり、フレーズを区切ってゆっくり練習するよう助言する。

イ 評価方法の具体例

(ア) 観察による評価の観点

- ・「六段の調」を聴いたイメージについて、感じたことを話し合う。（観点Ⅱ－①）
- ・箏の音色や表現上の効果や曲のもつイメージを積極的に発言している。（Ⅰ－①）
- ・箏の基本的奏法を理解し、表現している。（Ⅲ－②）
- ・箏の練習に意欲的に取り組んでいる。（Ⅰ－②）
- ・調弦方法を理解し、調整しながら他の生徒と音を合わせている。（Ⅱ－②）
- ・曲のリズム、音高、フレーズを把握している。（Ⅱ－③）
- ・楽譜に示された記号を理解し、表現上の工夫をしている。（Ⅱ－④）
- ・二声部に分かれ、聴き合いながら演奏している。（Ⅲ－⑤）

(イ) 学習カードによる評価の観点

- ・箏の歴史について、VTRや資料から得た知識及び箏曲の作品について学習カード1に記入する。（Ⅳ－①）
- ・箏の構造を理解し、各部分の名称と役割を学習カード1に記入している。（Ⅰ－①）
- ・奏法による音色の変化を感じ取り、奏法別にまとめて学習カード2に記入している。（Ⅱ－⑤）
- ・演奏に際して工夫したことを学習カード2に記入している。（Ⅱ－⑤）

(ウ) 演奏による評価方法

- ・楽器（箏）に対する上体の向き、両手の演奏フォーム等、正しい姿勢で行われている。（Ⅰ－②）
- ・パートの調和、テンポ（間）、音量のバランスを考え演奏している。（Ⅲ－⑤）
- ・楽曲のもつ、特徴を生かした演奏技能を身に付けている。（Ⅲ－④）

(2) 観点別評価の進め方

ア 考え方

(ア) 「関心・意欲・態度」について

観点Ⅰ－① 「願望や夢を基に発想・構想し、自分らしさを生かそうとする。」

ここでは積極的にインターネットや新聞などの資料を利用し、調査・研究していることが認められる場合は「十分満足できると判断される」状況（A）と評価する。また「努力を要すると判断される状況」（C）と評価される生徒の指導の手だてとしては、生徒が興味を示すような環境問題を提示したり、キーワードとなる言葉を検索させるなどのヒントを与えたりする。

(イ) 「創造的な表現の技能」について

観点Ⅲ－③ 「自分がデザインしたものの完成予想図などを描いたり、材料を組み立てたりする技能を身に付ける。」

ここでは発想や構想をもとにアイデアスケッチが的確に独自に表現されていることが認められる場合は「十分満足できると判断される」状況（A）と評価する。また「努力を要すると判断される状況」（C）と評価される生徒の指導の手だてとしては、個別指導において、生徒の構想からイメージされるキーワードをできるだけたくさん引き出し、それを形にできるように具体的に説明する。

イ 評価方法の具体例

(ア) ポスター作品による評価方法

[具体の評価規準及び評価の観点]

- ・ 自然や物をよく観察し、美的秩序や構成要素を感じ取り、表現に生かす工夫をする。(観点Ⅱ－③)
- ・ デザインのもつ情報伝達性を理解し、創造的な表現に生かす工夫をする。(Ⅱ－④)
- ・ 材料や用具の創造的な生かし方などを工夫する。(Ⅲ－①)
- ・ 色彩や形体の機能を考え、意図に応じた制作の方法を工夫する。(Ⅲ－②)

[評価方法]

- ・ 環境ポスター作品の点検、分析

[評価の実際]

- ・ 観点Ⅱについては、ポスターの情報伝達性を理解し、制作意図が明確で、構成などに創意工夫がなされている状況を（A）と評価する。
- ・ 観点Ⅲについては、全体の調和を考えた配色がなされ、材料や用具の使い方に工夫がみられる状況を（A）と評価する。
- ・ 観点Ⅲについて、配色等において調和がとれていない生徒に対しては、何が原因かを分析し、そのことについて具体的に説明し指導する。

< 観点別の評価結果を記録する表の例 >

単元名	環境ポスターをつくろう								年 組 番				氏名							
題 材 評価方法	調査と研究 課題レポート				アイデア スケッチ アイデアスケッチ				色彩について 色彩理論プリント				環境ポスター の制作 環境ポスター作 品				レポートとプレ ゼンテーション プレゼンテーシ ョン・鑑賞カード			
	観点Ⅰ	観点Ⅱ	観点Ⅲ	観点Ⅳ	観点Ⅰ	観点Ⅱ	観点Ⅲ	観点Ⅳ	観点Ⅰ	観点Ⅱ	観点Ⅲ	観点Ⅳ	観点Ⅰ	観点Ⅱ	観点Ⅲ	観点Ⅳ	観点Ⅰ	観点Ⅱ	観点Ⅲ	観点Ⅳ
評価																				

(2) 評価の場面Ⅰにおける観点別評価の進め方

ア 考え方

(ア) 「関心・意欲・態度」について

観点Ⅰ－④「他の生徒の作品について、そのよさや美しさを感じ取り、意欲的、主体的に理解しようとする。」

この場面では、相互評価を通して書のよさや美しさを感じ取り、表現の工夫について発言し、作者である生徒に伝えることができれば（A）と評価する。「努力を要すると判断される」状況（C）と評価される生徒へは、鑑賞活動に消極的なのか、鑑賞の仕方についての知識が不足しているのかを確認し、後者の場合は、教師が鑑賞の観点などを説明することで、鑑賞能力を高めるようにする。

(イ) 「芸術的な感受や表現の工夫」について

観点Ⅱ－③「自らの表現意欲を高め、用具・用材の使い方を理解し、線質、字形、全体構成などについて工夫する。」

ここでは表現と鑑賞を通して身に付いたことを生かし、自分の意図に合うように書体・線質・字形・全体構成などを工夫しているかを、「観察」や「作品Ⅲ」で評価する。「観察」においては、自分の選んだ言葉をどのように書き表したいかを再確認し、それを表現するために適した表現法を試行錯誤し、主体的な工夫が見られるかを観察する。さらに「作品Ⅲ」において、「作品Ⅱ」と比較しながら制作カードの記載の内容に基づいて工夫し、十分に表現していれば（A）とする。（C）と評価される生徒には、教師が例示しながら説明し、工夫して書くことへの関心を高めるようにする。

イ 評価方法の具体例

(ア) 学習カードにおける評価の具体例

[具体の評価規準及び評価の観点]

- ・鑑賞と表現は相互に関連していることを理解し、書のよさや美しさを感じ取る。（観点Ⅳ－①）

[評価の手順]

- ・スライドによる名筆や過去の生徒作品の鑑賞及び学習カードへの記入
- ・学習カードの記述の点検・分析

<学習カードの例>

作品Aから受けた印象を書こう。	
作品Aの表現で工夫されていると思った点を書こう。	
自作の表現で工夫しようと思った点を書こう。	

[評価の実際]

- ・カードの記述より、さまざまな表現の工夫を意欲的・具体的に捉えており、自らの作品に反映させていこうといった積極的な姿勢が見られた場合（A）と評価する。（C）と評価される生徒については、鑑賞の観点を説明し、記述を促していく。

6 観点別評価の総括

(1) 総括についての考え方

「学習活動における具体的評価規準」ごとにA、B、Cの評価を行い、それらの結果を総括し、題材における観点ごとの評価とする。その際、原則として「学習活動における具体的評価規準」の評価結果のうち、最も数の多い記号が題材における観点ごとの学習状況を最もよく表しているという考え方に立つて行う。

例えば、ある観点の評価規準が3つあり、それぞれの評価規準に照らして行った評価規準が「A、A、B」なら「A」と総括する。ただし、例えば「A、B、C」や「A、A、C」のように、「A」、「C」の両方が含まれている場合は、「B」と同様の評価結果と見なして総括するのが適当であるとする。

また、評価結果が「A、B」のように「A」の数と「B」の数が同数になることがある。このような場合は「A」、「B」が同数であれば「A」とする。」など、あらかじめ総括する方法を決めておくことが大切となる。

なお、題材のねらいや生徒の実態等に応じて、四つの観点のいずれかの評価規準に重みをつけることも考えられる。

(2) 学期末及び学年末の評価への総括

＜題材ごとの観点別評価から学期末評価を総括する方法の例＞

観点 題材	関心・意欲・ 態度	芸術的な感受や 表現の工夫	創造的な表 現の技能	鑑賞の 能力
題材 1	A	B	C	B
題材 2	B			A
題材 3	A	A	C	B
題材 4	B	B	B	A
題材 5	B	A (※重み)	B	B

→空欄はその題材について評価できない項目
(例：題材鑑賞・批評・論述等が中心の場合)

→※観点「芸術的な感受や表現の工夫」で、
AとBが同数となるが、題材5に重みをつけてい
るため学期末評価はAとなる。

学期末評価	B	A	B	B
-------	---	---	---	---

↓

学校で定めた 5段階評価	学期末評価「BABB」から導かれた評価・・・ 4
-----------------	---------------------------------

→BBBB=3、ABBB、AABB=4
AAAB、AAAA=5
(事前に決めた考え方)

表の「関心・意欲・態度」の評価のように、各題材の評価が「A B A B B」の場合、学校で定めた基準により、学期末の「関心・意欲・態度」の評価を「B」とする。題材ごとの重みが異なれば、「芸術的な感受や表現の工夫」の各題材の評価「B A B A」が学期末評価では「A」になることもある。(以上、表を縦に見る)

このようにして求めた観点別の学期末評価「B A B B」については、例えば、「B B B B」の場合は学期末評価を「3」、「A B B B」あるいは「A A B B」の場合は「4」、「A A A B」あるいは「A A A A」の場合は「5」というように学校で事前に考え方を決めておいて学期末評価「4」を出し、学年末には学期ごとの評価を総括し、評定を出す。

評価をどのように総括するかについては、シラバスなどを通して事前に生徒・保護者に示すことが大切である。